

復習シート 第三学年 国語



組	番号	名前

1 次の文章はA子さんが国語の授業で自分の体験をもとに書いた「物語」風作文です。これを読んだ

B君の感想等が、その後にあります。それらを踏まえて後の問いに答えなさい。

①その眼が嫌だった。

期末テストを返す先生の口から

「今回も最高点は小鳩だ。さすがだな、小鳩。」

という言葉が発せられた瞬間、彩に向けられたクラスメートの眼には、賞賛と羨望、そしてあきらめとある種の憎悪が含まれているように彩には思えた。名前を呼ばれ答案を受け取ったとき、先生は微笑みながら何か言葉をかけてくれた。反射的にお辞儀をしたものの、先生の言葉の意味は彩の心には全く届いていなかった。今自分に注がれているあの多くの眼からはやく逃れたい、そんな気持ち彩を支配していたのだ。そそくさと自分の席に戻ると、すぐに答案を机にしまい、あの眼から逃れるように視線を机に落としたまま、彩はその後の授業を受けていた。梅雨空から落ちる雨粒が、彩のすぐ横の窓ガラスを休むことなくたたいている。その小さな音だけが、彩の耳に届いていた。

中学三年生ともなると、友達どうしで話していても勉強のことが話題になることが多い。しかし彩を取り巻く友達たちはその話題になると決まると、

「彩はいいわよね、できるから。」

とうらやましそうにつぶやくのだ。そして、急にその場は何とも言えず気まずい雰囲気となってしまう。遠巻きに話を聞いている男子などは、

「勉強ができるからって、えらぶんじゃないよ。」

と聞こえよがしに言ったりもするのだ。さすがにそんな声を耳にすると、友達の咲良さくらなどは、

「彩はそんな子じゃないわよ、何言っているの！」

といさめてくれる。そんな咲良でさえ、最近はずっと彩と距離をとるような素振りを見せることがあるのだ。

期末テストが返されてから数日は、特に勉強や進学の話が多かった。教室は、彩にとって居心地の悪い空間となってしまっていた。

「私だって、何もしないでいい点数をとっているわけじゃないのよ。」

彩は思い切り叫びたい衝動にかられていた。

「遊びたい、テレビを見たい、音楽を聴きたい……、そんな気持ちを抑えて頑張っているのに……。私の努力や苦勞にはちっとも目を向けず、私のことを特別だなんて思ってる。」

帰りの会を終えた教室では、だれかれとなく二学期のはじめに行われる文化祭について話していた。学活で先生の言っていた文北祭実行委員を誰にするかがその話題の中心だった。不意に誰かが

「小鳩にやらせればいいじゃないか……。」

と言った。

この言葉を耳にした瞬間、彩の中で張りつめていた何かがつつんと切れた。

ガタン！

彩のいすが大きな音をたてた。

「何でも私にばかり任せないでよ！ わたしだって、^②わたしだって……。」

震える声を必死に押さえながらようやくこれだけの言葉を発し、彩は教室を駆け出して行った。

※校庭の隅で彩は一人立ちつくしていた。昨日までの^③長雨でぬかるみきつた泥が彩の靴を汚している。

「みんな大変なことは何でも私にやらせようとする。ああ、もう何もかもが嫌になっちゃった。一生懸命やる人が損をするんだ。ばかみたい。いいかげんに自分の好きなことやってた方がずっと楽でいいや。」

汚れた靴で小さく蹴飛ばしている泥をながめながら、彩はつぶやいてみた。

ピシッ、ピシッ、ピシッ、……。規則正しいリズムで小さな音が彩に近づいてきた。誘われるように、彩はにじむ視界をその音の方に向けた。環だった。陸上部の環は、帰りの会が終わるやいなや体育着に着替え、ぬかるんだ校庭を一人走っていたのだ。環は決して陸上部でも速い方ではなかった。むしろ遅い方であった。

「よう、どうした？ 小鳩が一人でこんなところにいるなんて珍しいな。」

彩に気づいた環が、足踏みしながら声をかけた。

「……………」

彩は答える言葉を発せられなかった。

「小鳩でも、そんな顔することがあるんだな。」

その言葉がその時の彩の感情を逆撫でた。

「どうでもいいでしょ。あんたこそ、なんでこんなぐちゃぐちゃの所を走ってるのよ！」

彩は自分の言葉の棘^{とげ}に少し戸惑ったものの、環に向けた強い視線をそらさなかった。^④その視線と言葉に、環の足踏みが止まった。腕で流れる汗をぬぐって、環はじつと彩を見つめ、それからこう言った。

「俺、今度の大会で部活引退なんだ。決して速くはないけど、俺は俺なりに一生懸命やってきた。だから最後の大会を、自分が満足できるように迎えたい。一緒に走るヤツには負けちまうかもしれないけど、自分にだけは負けたくないんだ。」

言い終えると、環は足踏みを再開した。

「そう、自分に負けたくないんだ。」

つぶやくようにもう一度言うと、

「じゃあな！」

という言葉を残して、またぬかるんだ泥の中へ駆け出していった。環の後ろ姿を追った彩の視線の向こうに、厚い雲の合間にのぞく青空があった。

「あやあー」

ぬかるみの中を咲良が走ってきた。

「ごめんね、彩。何でもみんな彩にばかり押しつけちゃって……。わたし……。クラスのみんなに言ってきちゃった。でも、私も、^⑤彩をそんな眼で見ってしまったのかもしれない……。ほんとに、ごめんね。」

さっきとは違う目頭の熱さを感じ、彩は涙がこぼれ落ちないように上を向いた。彩を覆うように広がっているケヤキの枝に、セミの抜け殻が一つしがみついていた。その先の大きく広がった青空を見つめながら、「☆
「、そんな気持ち彩の胸に広がっていた。どこかで蝉の鳴く声が聞こえた。」

問四 「 e 」に入る文として最も適切なものを、次のア～エから選び、その記号を書きなさい。

B…④その視線と言葉に、環の足踏みが止まった。とあるけれど、この時の環の気持ち
ちは、「 e 」というところじゃないかな。

ア 彩があまりに怒って突っかかってくるので、頭にきて何か言い返したくなった。
イ 彩があまりにも真剣な表情で見つめていたので、質問にすっかり答えようと思った
ウ 彩がしょんぼりしているので、心配になって、何でもいいから答えようと思った。
エ 自分がひそかに練習している理由を聞かれたので大会にかける熱意を話したくなった。

問五 次の「 f 」に入る一文を※印より前の部分から探し、その初めの五字を書きなさい。

B…「 f 」⑤彩をそんな眼で見ってしまったのかもしれない……。とあるけれど、
「 f 」という文に咲良のその態度が表れているね。

問六 次の「 ☆ 」に入る彩の言葉として最も適切なものを次のア～エから選び、その記号を書きなさい。

B…本文中の「 ☆ 」に、彩の気持ちがよく表れているよね。

- ア 文化祭実行委員、引き受けてみようかな。
- イ 文化祭実行委員、咲良にやってみよう。
- ウ 文化祭実行委員、もう一度きっぱり断ろう。
- エ 文化祭実行委員、適任者はやっぱり私だな。

